

日蓮主義研究

法華会と在家信仰

春日屋 伸 昌

(法華会理事長・中央大学教授)

法華会の成立

—

ただいまご紹介いただきました春日屋でございます。与えられました演題は、「法華会と在家信仰」ということでございます。そこではじめに、法華会とはどういう会かということをし申し上げまして、それから後に、在家信仰について、少し私の考えておることを申し上げてみたいと思ひます。

法華会は大正三年五月に発足致しました。これの動機と申しますのは、ちようど第一次世界大戦の時に、日本は青島^{なご}などを占領しまして非常に士気が揚つており、国民が戦勝に浮かれていた時代でございます。その時に、ちようど旭川であつたそうでございますけれど、その師団に山田三良先生と小林一郎先生とが呼ばれて行かれ、そこで講演をなさつた。その往復の道、東京から旭川までの道、昔ですから三十時間ぐらいかつたと思ひます。その間、ずっと一緒にいらつしやつたわけでございます。いろいろな話をなさつたと思ひます。その時に、ご兩人が一致したこと

は、「このように戦勝に浮かれている日本国民の精神構造というもの、それは非常に心配である。戦いに勝ったなんていうことは、これはもうつまらんことである」、国民の精神を振興する、なんていいますと、何か軍国主義的に聞かえますけれど、そうではなくて、「根底を養わなくてはならない、しっかりした心の柱を作らなければいけない」ということで、お二人は意見が一致したわけですね。

約半年かけていろいろな同志の方を募られ、そして大正三年、たしか五月十二日とありますから、伊豆法難の日に、「法華会」を設立したということ承っております。当時山田先生は東京大学の教授で法学博士という非常に地位の高い先生でございますから、いろいろな方が趣旨に賛成されました。発起人が二十数名いらっしゃいます。この時、小林先生が三十八歳、山田先生が四十五歳でいらっしゃったと思います。どういう人が発起人かと思つて調べてみただけですが、存じ上げない方が大部いらっしゃいます。私が存じ上げている方は、例えば山田三良先生・小林一郎先生、『法華経の行者日蓮』という著書のある姉崎正治先生、それから矢野茂という方がいらっしゃいます。この方は元大審院の判事、いま大審院というのはございませんが、今の地位でいうと、最高裁判所の判事という地位の方でございます。それから江川英武という方、この方は江川家の流れの方です。この方のたしか息子さんだと思つた方が、江川英文氏で、東京大学の教授をなさつた方いらっしゃいます。この方もかつては法華会の理事をされていらっしゃいました。それから辰野金吾、この方はその当時工学博士で建築の日本の最高権威、たしか東京大学の教授であつたと思つた。この息子さんがあのフランス文学者の辰野隆さんです。辰野隆さんも実は法華会に非常に関係のある人です。と申しますのは、辰野隆さんと山田三良先生とは義理の兄弟なんです。つまり奥さん同士が姉妹ですから。たしか法華会の理事もなさつたかと思つています。それから高島平三郎さん、この方は心理学の専門の方で、たしか立正高校の校長。それから金原明善という方がいらっしゃいます。この方は、浜松の出身の方で、株式会社丸善の創始者のお父さんになれる。金原用水という用水がございます。実は私、土木の関係で金原用水に毎年行きまして実験したこと

がございます。その金原用水の今の理事長が金原稔という人で、金原明善さんのお孫さんになる。金原明善翁の記念館がございます。明善翁が法華經の信者だということをおぼろげに存知ない方が多いんですけど、金原明善という方は、法華經の信者でいらつしやったんです。まあ、そういう人達が發起人となりまして法華会を設立したのでございます。

このような方達は全部在家の人なんです。それでは出家の方はどうかと申しますと、出家の方は相当な方が加わつていらつしやいます。その時の日蓮宗の管長の小泉日慈、それから井村日威、武見日恕、故武見太郎先生のお父さまです(実は伯父さん)。こういう方達が法華会を創立なさいました。ちよつと思議に思われるかも知れませんが、田中智学や山川智応という人達も、この設立には相当力を尽くしていらつしやる。

そういうわけで、大正三年五月十二日の伊豆法難の当日に、法華会が出来ました。

その時に発刊致しました言葉がございます(本稿末尾参照)。これは、名前は書いてありませんが、私はつい最近まで小林先生がお書きになったものだと思つておつたんです。ところが、どうも小林先生のものではなさそうなんです。と申しますのは、これを読んでおりますと、その当時、大正の初めのころ、日本の思想界をリードしていた学説というのがドイツのオイツケン、フランスのベルグソン、こういう人達の新しい学説が打ち出されているということが書いてある。また時を同じくして、山田先生の「教育と宗教」という論文が出ている。それを見ますと先生は、オイツケンとベルグソンのことを相当詳しく書いていらつしやるから、「あつ、これは小林先生じゃない、山田先生がお書きになったんだな」と私は考えを改めました。ですからこの発刊の辞は、山田先生が法華会設立の趣旨を皆さんに訴える意図でお書きになったんだと思います。

どういうことが書いてあるかと申しますと、こうなんです。明治天皇の残された偉業を大正年代に確立しなさいかん。これは大正の三年でございます。ちよつと皇太后のお亡くなりになられた時でございますから、明治聖帝の遺

徳をまず出すというのは時期としては当然だ、と思います。今から考えれば、古くさいと思われるかも知れませんが、その当時としては、それは当然のことなんでしょうね。それはどうすべきかというところ、今の日本の国民というのはいろいろな方面において行き詰りを呈している。これを根本から刷新するには宗教でなければいけないと、まずその宗教というものを出して行くわけです。ちょうど教判のように、この宗教のなかで何がいいか、それは大乘仏教である。大乘仏教のなかで何がいいか、それは法華経である。法華経のなかで誰の宗派がいいか。それは日蓮聖人だ。こういうふうには、教判的な考え方で、日蓮聖人の主義・主張と法華経の信仰とを鼓吹する必要があるということ、を強調なすっているわけでございます。発刊の辞をご覧になりますと、その当時の法華会の趣旨がよくおわかりになると思います。私もこれを改めて読んでみまして今でも決して古くない、極めて高尚なる思想だと思っております。「今後といえども、なお西欧の科学的知識を輸入する必要を感ず」とまでいつている。「然れども精神上の根本教義に至りては我に斯くの如くに優越せるものを有す」。この「優越せるものを有す」というのは、これは法華経の教え、日蓮聖人の教えのことです。それから、「我はこれを高く奉持して徐おもむに彼の我に近づき来るのを待つべきのみ」、この彼というのは西欧のことでございます。我というのは日本のことでございます。これはちょうど、日蓮聖人が「時を待つべきのみ」と言われた、あの思想が彷彿する文章でございます。「法華経の教義と日蓮上人の主義主張を現代に宣伝すべき急務を認め、敢えて微力を揃はからずして本会を創設し、文筆と言論との二途によりて斯の大事に当らんとす。月刊雑誌『法華』の発刊は之が第一歩に過ぎず、江湖有力の君子にして援助を惜しまれずば、吾人の事業も亦一歩は一步より進まん」云々と、こういうふうには言っておられるわけでございます。

創刊号は大正三年五月に出たわけでございます。これがなんと百数十ページ、毎月一号ずつ出ます。大正年間ものは東方出版から復刻版が出ました。それをご覧になりますと、法華会の大正年間における活動が非常によくわかります。その当時は理事長とは申しませんが、会長でございますが、会長は山田三良先生、編集主幹が小林一郎先生でございます。

いました。そして筆を揃えて書いていらつしやる方はと申しますと、例えば柴田一能上人、井村日威上人、本多日生上人、山川智応氏、田中智学氏、高島平三郎氏、そういった人たちが毎号執筆なさっております。今日からこれを読みますと、非常におもしろい、おもしろいという用語がありますが、非常におもしろいですよ。

この基金はどうしたかと申しますと、山田先生がほとんど私財をなげうって出来たものでございます。先生は満州鐵道の株を相当お持ちでございます。そういうものを全部提供されまして、その利子で運営が出来た程なんです。小林先生がしばらく編集主幹をなさっていらつしやいまして、それから田中盛枝という方が編集を担当されました。この方もずいぶん健筆を振るっておられます。これは女の方じゃございません。「盛枝」ですけど男性の方です。この方が編集を担当なさいました。それからしばらくしましてから浅井要麟先生が、お亡くなりになるまで担当なさいました。

二

私が法華会に入れて頂いたのが、昭和十四、五年の頃でございます。どういう縁かと申しますと、ある時私、新聞を見ていましたら、新聞の広告に、平凡社が『けいしよたいちう経書大綱』を発売するという大きな広告が出ている。これは支那哲学の四書五経ですね。それを主として道教の老子・列子・莊子ですね。それに墨子・荀子・韓非子、それから孫子とか尉繚子うゑりょうしとかいった兵法書ですね、それが全部で二十五巻でした。『けいしよたいちう経書大綱』二十五巻が出るということを広告で知った。青年時代つていうのは哲学に凝るわけです。私は高等学校の頃でしたからね、カントの実践理性批判とか、純粹理性批判とか読まないとかバカにされるといふ時代でした。岩波文庫を購入して読んだが、何が何やらさっぱりわからない。とてもカントは駄目だと思ひ、何か支那哲学を読んでみたいなあと思つていたところへ、これが出た。それで早速取り寄せまして読んだんです。

これが今から考えても驚くべきことなんです。大体一冊が菊判で五百ページから六百ページあるんです。それが毎月一冊ずつ出るんです。そのような大部なものが一体どうやって出るんだろう。実に不思議に思った。これが二百ページくらいのもならないこともないかも知れないですが、しかし五、六百ページですよ。しかも9ポでもってビッシリ書いてある。それが月に一冊です。これは後でわかったことですが、小林先生が片手に原典をもっていらっしやる。ちょうど羅什三蔵が法華経を翻訳するときみたいなもんですね。ただ羅什の時には何百人という人が翻訳に参加したということが書いてあるが、小林先生の時は聴き手は二人きりもない。その二人は速記者、今みたいにテープがあるわけではないんです。速記しかなかった。昭和十三年頃の話でございます。片方に原典をもつて、先生が読みながら講義をなさる。その講義を二人が速記をするわけです。その日に、速記者がそれを原稿用紙に清書して、翌日先生のところへ持って来るわけです。そうすると、先生がそれに赤を入れる。それが印刷に付される。印刷されたものを平凡社で内校して再び先生がそれに赤を入れて返す。それがですね、月に五、六百ページのもので出来るんですよ。これにはもうびつくりしました。先生はわざわざ一日に三時間から四時間講義をなさったんじゃないでしょうか。それが流れるような講義なんです。

小林一郎という方は、在家として近代における法華経研究、日蓮聖人研究の筆頭に挙げるべき人で、これから研究すべき人だと思う。私もだいたいぶ研究しました。実に興味深い人です。小林先生について、ちょっと申し上げますと、実に学殖があるんですね。先生は東京大学の哲学を出られて、その当時は恩賜の銀時計というのがあって、それは全学の中で一番出来た人に授かるんですが、それを頂いている人なんです。ですから大学から教室に残れといわれたんですけれど、小林先生という人は、そういう象牙の塔にこもって学術論文を書くということはお嫌いなんです。そんなことよりは、大衆に正しい思想を普及するということを念願にしておられましたから、お残りにならないで在野にいられた。そして殊に法華会の主筆でいられ、毎号たいへんな量の原稿をお書きになった。

そのうちに日蓮宗大学から、ぜひ哲学の講師に来てもらえないかという誘いがあつたんですね。それで先生、ほかのところは全部お断わりになつておられたようですね、日蓮宗大学には行こうといわれて、日蓮宗大学で哲学の講義をなさつた。それが二十七、八歳の頃です。二十三、四歳で大学をお出になつて、それで二十七、八歳の時に、日蓮宗大学の講師になられた。講師といつても専任じゃございません、兼任講師です。で、何を講義していられたかという、西洋哲学、殊に小林先生、カント哲学の専門家でございますので、おそらくカント哲学、それからプラトンドとか、アリストテレスだとか、そういうギリシヤ哲学ですね、そういうものを主として講義されたと思います。その時にこれは、先生が書いておられるものから私が知つたことでございますが、本間海解という方がいらつしやいます。本間海解という上人、小林先生の述懐によりますと、「初対面の時から非常に高僧であつた。ほんとの高僧であつた。むずかしいことは決して何もおっしゃらないけれども、いかにも高僧であるということを感じ取つた」と、こういうふうにおつしやつてゐる。その本間海解師に、「日蓮聖人のものをちよつと読みたいんだけれども、何から読んだらよろしゅうございますか」とお聞きになつたんだそうです。そしたら本間海解師がじーと考へておられて、「そうです、開目抄からお読みになられたらどうですか」といわれたそうです。それで小林先生は、すぐに『縮刷日蓮聖人遺文』を買ひ求められました。返子に養神亭というのがありますが（日本式の旅館で、つい最近まであつたんですが惜しいかな経営不振でもつて無くなつてしまいました）、そこへ先生、縮刷御遺文をもつてこもつた。先生、何でも一つの仕事で何かをお読みになるときは、どこかへこもる癖がある。そして朝から晩までそれをやる。その時も一週間ぐらいで遺文を全部読んでしまふ。日蓮聖人のご遺文を読むにあたりまして、注釈書がないとなかなか読めないんですが、先生はそうじゃない。先生は、漢文の素養というものを若い時から漢学の塾に通つて叩き込まれてゐるんですね。ですから遺文も、読めばそれでわかるんですよ。注釈書なしで。そのままズバリお読みになつて日蓮聖人の思想をすっかりつかまされた。それから問もなく先生は、日蓮聖人のものをいくつもお書きになりました。で、ある時に、日蓮宗

大学でまた本間海解師にお目にかかつて、「この頃はご遺文を開く日が多くなりました」と小林先生がおっしゃった
ら、本間先生が「ああ、ありがたいことでございます」と言われたことが非常に印象的であったということを、私ど
もにお話しになったことがあります。

小林先生が日蓮聖人のご遺文をお読みになったのが二十八歳、十年経って法華会の創立に加わったのでございま
すね。そして先生は編集事務のことははじめのうちはなさっておられましたけれど、とてもそういうお仕事は一人では
出来かねますんで、田中盛枝という方が編集を手伝った。それからしばらくして浅井要麟先生、この方は立正大学の
教授でいらつしやいます。その奥さんが浅井千代子、ご夫妻で「法華」の編集をずっとなさっていて、お亡くなり
になるまで非常に力を尽された。お亡くなりになったのが昭和十七年十二月、急にお亡くなりになった。実は法華会
の理事をなさったり、講演会の講師として活躍になった方で守屋實教という方がいらつしやった。この方が同年八
月お亡くなりになったのですよ。そのご法事の時に、浅井先生が導師をお勤めになった。ところが、その導師をお勤
めになっている時に、読誦された「自我偈」が途中でつかえちゃうんですよ。「おかしいな。先生が自我偈をお間違
えになるはずがない」、皆そう思った。そしたら間もなくご自宅でお亡くなりになった。今でいう脳溢血なんぞござい
ましようね。柱と頼むお二人がお亡くなりになったので、小林先生は非常なショックを受けられた。それが十二月で
ございました。こういう歌を詠まれたんですよ。「木がらしや 取り残されし 一つ松」。この歌をお詠みになったの
を、私、覚えております。

で、小林先生が舌癌で急にお亡くなりになったのが、昭和十九年三月のことなんです。山田三良先生の奥
様繁子さんが、実は江川家の方なんです。山田先生はその奥様の感化でもって法華経を研究し、日蓮聖人を研究なさ
て信者になられた。大変熱心な法華経の信者でございます。この山田繁子さんが次のような歌を詠まれたのです。亡
くなられたのがちょうど春で、雪が降っております、それでこういう歌をお作りになった。「頼みてし 一木の松も

枯れ果てて 山肌寒く 春の雪降る」。小林先生が、「取り残されし 一つ松」だといわれたそれを受けていることは、すぐおわかりだと思えます。小林先生を頼んでいたけれども小林先生もとうとう逝かれたということ、こういうふうに詠まれた。これに私、非常に感銘を覚えておるんです。歌にですね、打たれました。

それからもう一つですね、小林先生がお亡くなりになる時に、小林先生のお宅は笹塚というところにございました。それで、久保田正文先生のところに、山田先生から電話がありました。その当時、久保田先生は日蓮宗宗務院の教学部長をなさっておられたと思うんです。非常に忙しいことがあったと言っておられました。それはどういうことであるかという、ちよつと本筋を離れますけれど、軍部がですね、日蓮聖人のご遺文はけしからんと。例えば『月水御書』には、「日域辺土の小嶋」とあり、『四恩鈔』には、「此日本国は其仏の世に出てまします国よりは丑寅の角にありたる小島也」という文章がある。そこに「小島」という言葉がある。「小さな島とはけしからんから削除せよ」ということで、そのほかにもたくさん指摘されて、軍部がそれらの削除を命じる。それに対しまして久保田先生は、毎日のように文部省に行きましてね、「日蓮聖人の考える日本国というものは、そんなことじゃないんだ」ということを力説なさいます。削除ということは沙汰止みになったんです。そういうことがあつて、非常に先生はお忙しかつた。ところが山田先生から、「小林君があなたに会いたいと言っているから、すぐ行ってやってくれないか」という電話がありました。それで忙しい中を、久保田先生は笹塚の小林先生の家に行つたんです。すでに小林先生は寝たきりで天井を向いたままです。久保田先生は、「先生、しつかりして下さい。きつとよくなりますよ」と言おうとして行つたのですが、いきなり小林先生がこういわれたそうです。「もう駄目だと決まりました。出直して参ります。後はよろしく願ひします」。これだけおっしゃった。久保田先生は、だから「しつかりして下さい」なんてことは言えなかつたというんですね。それで一緒にお題目を三唱して別れた。その時、久保田先生の後ろ姿をじつと見ておられたそうです。それから間もなく小林先生はお亡くなりになったんですが、「後のことをよろしく頼む」という

のには、二つのことがあるんですね。一つは自分の墓を仙寿院にお願いしたいということ、もう一つは法華会ですつと続けていらつしやつた法華経講義をあなたにお願いするよ、絶ゆることなく講義を続けて下さいよ、ということですよ。「後のことはよろしく願います」というのは、その二つのことであると、私は感じた」と、久保田先生は言っておられた。小林先生がお亡くなりになってから、久保田先生は、お亡くなりになる一年前まで、小林先生が講義されていたのと同じ学生会館の三〇六号室で法華経の講義をなさつたのです。余談ですが私が小林先生に初めてお会いした昭和十五年頃、小林先生は、『摩訶止観』を法華会の例会で読んでおられました。

三

話のもとへ戻りますけれど、私が法華会に入ったのはどうしてかといえますと、こうです。その『経書大綱』を読みますと、非常に面白い、よくわかる。第一巻は論語の上、その次が孟子・老子、そういったものが講義ですから、口述ですから非常に面白くすらすら読める。書くものはどうしても堅くなるけど、口述ですから非常によくわかる。小林先生のアブローチの仕方というのがありますが、そのアブローチの仕方が西洋哲学だということがよくわかるんですよ。西洋哲学的なアブローチの仕方、つまりカントとかギリシャ哲学をやつていらつしやいましたから。そのアブローチの仕方が、ギリシャ哲学だということ、そして信仰は法華だということもわかるんですよ、読んでいて。ですから私は、今度はですね、小林先生の法華経についてのものを読みたいと思つた。この『経書大綱』というのは、実は先生が平凡社から『法華経大講座』を出され、その次に『日蓮聖人遺文大講座』をお出しになつて、三回目の講座なんです。私は『経書大綱』を通して先生の遍歴を知つておりますから、神田の古本屋で『法華経大講座』を買つた。揃いで十二冊ですか、それを朝から晩まで読みました。法華経というものは、一回読んだだけじゃよくわからなんですよ。二回繰り返してどうか、法華経の特色というのがわかる。

『法華經大講座』が世に出た因縁というのはこうです。平凡社の下中弥三郎という方がいらっしやる。今の社長の先々代でしょうか。平凡社が少し傾きかけたんです。その時に、「何か当るものを出さないと、会社が危ない。一冊や二冊のもので当ててもしょうがないから、何か全集物はないかしら」と、下中弥三郎さんがいろいろリサーチしたわけです。そうしたら、洗足で小林先生が法華經の講義をなさっているということを聞きつけ、そこで下中弥三郎さんは、実際に聞いてみようとしてそこへ行つたわけです。そこで、「これはすばらしい、これを一つ出そう」というんで小林先生を口説いた。先生は片手に原本を持って講義し二人が筆記してやるわけです。それで一年間に十二冊、あとから一卷、索引を入れまして十三冊の『法華經大講座』というのが出来た。それが昭和十年ぐらいのことでございます。それが非常に売れたんです。ベストセラーという程じゃないかも知れませんが、万は出た。おそらく万を越えました。それで平凡社が建て直つたんですから。下中弥三郎さんが小林先生を離さないわけですよ。

続いて、『日蓮聖人遺文大講座』をやる、『經書大綱』を出す。それが終つたら何をやつたかというのと、『易經大講座』十二冊です。「易」ですよ。そしたら今度は軍部から、「そんなものやつちやいかん。皇國精神をやれ」といわれましてね。先生は、「いやだ、いやだ」と言つておられましたよ。「皇國精神なんかやつたつて、そんなもの読めばわかるんだ。たいした思想じゃないんだ」と、先生おつしやつた。ところが、「やれつ」と命令が平凡社へ来たんです。それで先生もとうとう口説かれて、『皇國精神』十二冊をやつたんです。「神皇正統記」「中朝事実」「歴代詔勅」といったものですね。

小林先生には、こんなものもつたいないんです。もつともつとやつてもらいたいことが、我々としてはあつたんです。おそらく先生はこの後仏典大講座をおやりになるつもりであつたと、私は思つたんです。その証拠を最近見つけたんです。その証拠というのは、先生の日記がありますが、その日記を、この前ちよつと見たんです。昭和十七年のところを見た。先生は克明でね、その日誰が来たかについてというのが書いてある。私が昭和十七年に三回ぐらい行つて

んです。日付もちゃんと書いてある。それから、収入まで書いてあるんですよ。何月何日どこからいくら入ったと。昭和十七年と申しますとね、『皇国精神大講座』をやつていらつしやったんですが、平凡社から毎月五百円ずつ入っている。五百円か六百円です。その頃の五百円というのは、今の金額に換算すると、大変な金額です。で、いったい何部出ているんだらうと思つたら、四千部出ているんです。約四千部出て一割の印税でその位の額になるんですよ。だから『皇国精神大講座』は毎月四千部くらい出ていたはずですね。そんなこと少し余計なことだけど、何でその証拠を見つけたかという、日記の中にですね、「天野屋」というのがあります。旅館なんです。湯河原に今でもございます。その天野屋に四日間もつていらつしやるんですね。何を携つていらつしやつたかということも書いてあります。「華嚴經。華嚴經の再読。まえに読んだけど、もう一回華嚴經を読む。華嚴經を再読するといふんで天野屋にこもる」と書いてある。来客と講演依頼などを避けるために天野屋へ行つて華嚴經を読んでいらつしやる。ということとは、おそらく仏典大講座をおやりになるつもりで、『華嚴經』から重要な文句を抜粋しておられたんじゃないかろうかと、私推測するんです。私たち、必ず先生は仏典大講座をなさると思つておつた。戦争がなかつたら、おそらく易道大講座の次は仏典大講座をなさつたのではないかと思ひます。それが非常に残念ですね。

先生の講義の明快なことは、ほかに類がないと、私どもは考えております。どんなむずかしい仏典でも、我々にも極めてわかりやすく説明なさるんですね。それで昭和十何年か、私は『經書大綱』を読み、『法華經大講座』を読み、また『日蓮聖人遺文大講座』を読んで、そのうちに小林先生の講義を聞いてみたいと思ふようになりまして、先生のところへ伺つたら、先生いらつしやつた。「じゃお前ね、法華会つていうのがあるから、そこへ入つたらどうか」といわれ、法華会に入つたのが昭和十五、六年の頃でしたかな。その頃の法華会では何をやつていたかといひますと、前にも申しましたように、法華經大講座、それから『摩訶止観』。あとから考えてみますと、どういふ方たちがいらつしやつたかという、山田先生でしょう。それから二代目の理事長というのが市原しんが求もとという方、それから浅井要麟・守屋貫

教・望月敏厚・姉崎正治・茂田井教亨・兜木正亨さんですね。私いまでも覚えてる。私が一番若い人ですから、一番若い人を探したんですよ。そしたらどうもこの方が若そうだと思って、その人の隣に坐つたのが、後から思うと、兜木正亨さん。兜木先生は非常に親切でね、「あの、あなたね、摩訶止観の本持つてますか」と言っただけです。「持つてません」といったら、「じゃ、私が買って来てあげるから」とおっしゃって下さいました。あとで名前を伺ったら「兜木と申します」とおっしゃった。その頃、「国訳一切経」というのが、大東出版社から出ておりました。ところが品切れでね、兜木先生にお会いしたら、「実は品切れで手に入らないから悪く思わんでくれ」と言われたのを覚えています。『摩訶止観』というのをずうっと講義していらしたが、昭和十九年お亡くなりになりましたから、途中で終つてしまいました。

今申しましたようなわけで、久保田先生が法華經の講義を続けていらつしたんです。久保田先生は小林先生の高弟ですね、筆頭のお弟子さんでございます。だいたい久保田先生が東京大学の社会学へ行つたのは、小林先生のすすめなんです。小林先生が立正大学の講師をやつていらつして、立正中学におられた久保田先生をお呼びになつて、「あなたは僧侶、僧籍におありになるわけだから(まだそのときは僧籍にはなかつたけれど、家としては僧籍なんですけど)仏教学をやるよりは別の道をいらつしてらっしゃるかどうか、社会学をやつたらどうですか、なかでも仏教社会学をおやりになつたらどうですか。それには一高へ行つて、東大へ、あなただつたら行けると私は思うけど」。久保田先生は非常に嬉しかつたんです。後で何回もおっしゃるんだ。もう一人、池田とかいう人と二人を呼ばれて、「君なら一高へ入れると思うから、別の道を行つて日蓮宗の方に貢献してはどうか」と言われたということが、先生、非常にうれしかつたらしい。それで一高へ入り、東京大学の社会学を出て、ロンドン大学で仏教社会学を研究なさつたわけです。だからこれはですね、小林先生のお奨めなんです。お奨めで、先生は自分の一生の道を決められたということを、私は戦争中久保田先生から何回も聞いておる。

四

山田先生・姉崎正治先生などが貴族院議員をしていました時に、山田先生、小林先生、姉崎先生、その他、おそらく守屋・浅井そういう方々が山田先生のお宅へ集まったと思うんです。そしてどういうことを議したかというのと、「今の軍部のやり方というか、神風が吹くとかなんとか、そういう軽薄なことじゃいかん。だから一つ、君、貴族院でもって演説をぶて」と。実は私はまだ小童こわらでしたからそういうことはわかっておりません。新聞を見て、あつと思つたんです。で、貴族院で姉崎先生がとうとうとおやりになった。軍部をいきなり批評することは出来ないんですよ。だからやんわりやつた。神風のような浅薄な思想じゃいかんということ。この言葉を、私覚えてる。要約すると、最後に、「天祐を信ずるものは、天譴を恐るべし」。これは、法華会の主だった人たちが集まって、「議会で今のような浮薄な思想を少しづつやつつけないか」ということで、「天祐を信ずるものは、天譴を恐るべし」ということをいつたわけですよ。それが新聞に出まして、私はそれを見て、「ああ、これは日蓮聖人の立正安国論の精神を言われているなあ」ということを感じたものでございます。それから、法華会というのは右翼的な思想の持ち主が集つていっているんじゃないか、と時々いわれました。これは全くちがうですね。全く逆でございます。そうかといって、いわゆる共産主義的のように反戦思想をとなえるなんてことも致しませんでした。その頃、妹尾義郎さんとか、北一輝さんとかいうようなちよつと左でありながら少し過激な人たちがおりまして、はじめ妹尾義郎さんなんかも法華会に入つていらつしたんですけど、思想が合わなくて出て行かれました。そして別の一派を立てられました。

それからもおわかりのように、法華会は左翼でも右翼でもないのです。そういう片寄つた思想を、法華会は非常に嫌うんでございます。中道でなければいけないんですからね。ですから、先程申し上げましたような人達の特徴は何であるか、法華会の要員の特徴を一言で言えばですね、カリスマ的な人は一人もいないということです。だから法華

会は発展しないって言われているんですよ。しかしながら、いまの宗教の中で、一番長く雑誌を発刊しているのは法華会です。約七十年間続いている。これはですね、新興宗教のような大きな宗教団体には決してなり得ないですね。大きな団体になることは、誰かカリスマ的な人がいないとなり得ません。しかしこれは我々の嫌うところですが、最も嫌うところです。そうではなくて、本当の仏教の正法というものに順じて行くならば、五邪命を嫌うんです。ですから中には隔靴搔痒の感があるということもあります。けれどもまた法華会の純粋な信仰を本当に理解して下さる方もたくさんいらっしゃいます。自慢らしいことになって恐縮かも知れませんが、かつてあの加藤弁三郎さんと土光敏夫さんが対談なされたことが、「在家仏教」という雑誌に出ておりますが、その時に、加藤さんが土光さんに、「あなたの愛読書は何ですか」と言われた。そしたら土光さん、「愛読書は雑誌『法華』です」といわれた。そういうわけで、土光さんなんか、「法華」の愛読者の一人でございます。

在家信仰

一

在家運動というのは、何も法華だけではございません。いま土光さんが中心になって、木内信胤さん、そのお父さまが木内重四郎、この人も法華会の発起人をなさっておられます。朝鮮総督府の長官、京都府の知事もなさった方ですが、この人も熱心な法華経の信者です。そのお子さまが木内信胤さんですね。この木内信胤さんが、中心となって土光さんを会長にして「日本仏教徒懇話会」というのを作っていらっしゃいます。これには財界・政界の中で志のある人が相当加わっていらっしゃいます。柳田誠二郎さんとか、伍堂輝雄さんとか、そういう方たちが「仏教徒懇話会」を作っていらっしゃいます。これは純然たる在家の団体です。

それからもう一つ、浄土真宗系ですが、「在家仏教協会」があります。自慢めいたことを申し上げますが、「在家仏教」が出来る時、実は私は久保田先生の驥尾に附して会合にずーっと出席していたんですよ。で、その中心は誰かといえますと、亡くなられましたが、真野正順さんが中心なんです。それから増谷文雄、それから増永靈鳳それから竹中信常、それから久保田正文、それから武藤義一、それから私が一番下で、それに驥尾に附して在家仏教を興こそうということについて会合したことを覚えております。「在家仏教」というものは浄土真宗・禅系統の会合ですけれど、今も非常に活発になさっております。そのほかにもございましょうけれど、そういう在家仏教の団体があるということ、非常に心強いこととございまして、ますますそういう運動が盛んになればいけないと、私どもは考えておるわけです。

あまり時間がございませんので、専門の方もいらっしやる前ですけれど、ちょっと考えていることを申し上げたいと思うんです。在家主義と申しますか、我々、「主義」という言葉はあまり好きでないんで、使いたくないんですけど、もし「在家主義」ということを言うんだつたら、「出家主義」ですね、在家と出家、こういう仏教の二つの分け方もあるのだと思います。むしろ仏教の二つの分け方はこのほかにもいくつかございます。大乘と小乗、聖道門と浄土門、顕教と密教。こういうふうな分け方の中で、「在家主義」と「出家主義」という分け方もなきにしもあらずということ、大乘と小乗と密接な関係があるということはおわかりになると思います。どうも小乗と申しますと出家主義だと、大乘と申しますと出家も在家もない、そういう抱括的なものだというふうによく考えられる。私達も、小乗と申しますと、どうも「出家主義」と思ってしまう。

二

お釈迦様が、阿含経などでは、本当の悟りというものは、出家をしなければ悟れないものだといっている。である

から、自分の息子のラーフラ、養母のマハラジャパティ、それからヤシヨーグラ姫、義弟のナンダ、いとこのアーナ
ンダ、そういう人たちをみな出家させている。出家しなければ悟れないんだと。在家ではせいぜい死んでから天界に
行くだけだというわけで、いわゆる在家の人たちにお説教なされる時は、施論・戒論、それから生天論、この三つをお
説きになった。そしてこれが説かれてからあとで四諦の法門を説かれたんだと、それを次第説法というんだと、我々
は仏教書で知るわけです。

これが最もよく表われているのがヤサのこと、ヤサが出家する動機でございますね。五比丘をお釈迦様お釈迦様が鹿野苑で
教化なさって、そして六人の阿羅漢が出来て、仏教教団がはじめてそこに誕生しましたね。しばらくすると、金持の
息子のヤサが鹿野苑にやって来る、そしてお釈迦さまの方から声をお掛けになる。非常に憔悴して悩んでいるところ
に、お釈迦さまが施論と戒論と生天論とをお説きになった。で、施論、これは布施でございますね。布施の尊さ、む
ろん、この布施というのは、慈善事業、慈善ではございません。これは、自分が持っている尊いものを人に施すこと
によつて、自分の慳貪の心を無くせという修行徳目なんです。慈善事業、慈善はそうではございません。慈善は、
世の中の困っている者に金銭や物を与えて、その人を救つてやるんでありますけれど、布施はそうではなくて、これ
は、布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧の六度の中に入っていますように、修行徳目なんです。だから、お釈迦
さまはまず金持のヤサに対して布施の教えをお説きになって、慳貪の欲を絶たなければいけないということをおつ
しゃつた。

それから今度は戒論でございますね、戒です。この場合の戒は、いわゆる比丘二百五十、比丘尼三百四十八戒では
ございません。これは五つの戒ですね。この五つの戒が不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒という五つの戒を
お説きになって三番目に生天論をお説きになった。これがしばしば誤解されるところでございまして、これはですね、
こういう布施とか持戒とかいうものを守っていると、在家のものは死んでから天上界に生れて永く、永遠にとは言わ

ない、天人五衰という天上界の人だつて五つの衰えがはじまると死んじやうというんだから、永遠じやないんだけど、人間界にくらべるとずうつと永い。その天上界で樂を受けるよというのが生天論。そのためには布施と持戒を實行しなければいけないと、こう説かれたんだと、こうも解釈される。しかし私どもは、そういう解釈は採らないところなのでございます。

では一体何かというと、因縁、因果の理をお説きになつていらつしやいます。因果の理です。天上界に生まれると、いろいろなことは、これは一つの方便的な言い方なんです。世俗の人はバラモンで教育されておりますから、バラモンで苦行すると、将来は天上界に生まれる、こういうふうに言われている。だから天上界に生まれるためには、この布施と持戒とをやらんといかんぞということを、当時の思想をとり入れておつしやつていただけです。因果の教えをお説きになつておられる。善因善果、悪因悪果です。正しい行いをしていると、将来あなたは仕合わせになりますよ、また間違つた行いをしていると、あなたは将来みじめな境遇に落ちますよと。天上界に行くというようなことはこれは方便なんです。私はそう思います。またそう解釈している人は、私だけじゃございません。例えば、最近、ひろさちやさんがそういうことを言つていられる。私は同感でございます。そうしてその証拠には、四諦をお説きになつてゐる、この時に。四諦は苦・集・滅・道でございますね。お釈迦さまは、この苦・集・滅・道というものをお説きになつていらつしやるんです。

そしてヤサが仏門に帰しまして、彼の四人の友達が入りますね。四人の友達に十人ずつ、これは本当に十人ずつかどうかかわからないけれども、友達がいて、みんなお釈迦さまの教えを聞いて仏門に帰依した。それからヤサの親、それから奥さん、そういう人が皆在家の信者になつた。これが優婆塞・優婆夷の第一号であるとして書いてある。お釈迦さまを入れて六十一人の阿羅漢が生れたと、仏典に書いてある。これは阿含經に書いてある。お釈迦さまを入れて六十一人。そのうちの一人は如来であると。で、その時にお釈迦さまがなんとおつしやつたか。六十人の人に向いまして、

「いざ、伝道に旅立て」と。「我々の教えを理解するものが、この世の中にはたくさんいるはずである。であるから、これから伝道に、お前達は旅立て」と。「一人の道を二人して行くな」と。これは面白いですね。キリスト教の『バイブル』では、一人の道を二人で行けと書いてある。ところがお釈迦さまはそうではないんですね。「一人の道を二人で行つてはいかん。一人で行け」と書いてある。六十人の人がテンデンバラバラにいろんなところで布教しなさいという事、これは明らかに大乘の思想でございますね。小乗仏典の中には、大乘の思想がないなんていう人がいるけれど、そうじゃございません。大乘の思想というものが小乗の中にある。

いまお話しましたことは、阿含経の中に書いてある。大乘の經典から言っていることではないんです。大乘の經典なら当り前のことなんです。ところが小乗の經典に、そういうことが書いてあるわけでございます。このことから見ましても、私には、大乘というものが小乗の中になんだという、あとから生れたんだということには反対なんです。それはあとから発展はしたでしょう。しかしその萌芽は小乗の阿含経の中にあります。私はそう断言してよろしいかと思うんです。

もう一つ例を申し上げますという、雑阿含経の卷十三の中に富楼那^{ふろな}経というのがある。皆さんご存知でしょう。あの説法のフルナです。この説法のフルナがこういうことを言っている。私の生れ故郷のアタランテイ、阿含経の方ではイルナと書いてありますけれど、これはアタランテイ、ここの出の人です。「自分は西のアタランテイの故郷に帰つて、法を弘めたいと思う」、こういうふうに言いました。そうしましたらお釈迦さまは、こういうことを言われた。「西方イルナの人は兇悪兇暴、狂暴にしてよく罵りて駆逐すると聞かばまさにこれを如何にすべき」。お前が西方のアタランテイに行つて、向うの人達は非常に兇暴だ、その人達に罵られたらどうするかと言つた。そうしたらフルナは答えて、「石をもつて投げつけられなければ、私は幸いであると思います」。お釈迦さまは、「では、石をもつて打たれたらどうするか」と聞いた。フルナは、「石をもつて打たれても、刀をもつて切られなかつたならば仕合せであると思いま

す」。お釈迦さまは、「じゃ、刀でもつて切られたらどうするか」と。「刀で切られても殺されなければ、仕合わせであると思います」。「お前、殺されたらどうするか」と。そうしたらフルナイわく、「仏弟子の中には、自殺をするというような人もあるかと聞いております。私が法のためにこの身を捨ててならば本望でございます」と答えた。そこでお釈迦さまがこういうことを言われたということが、阿含経の中に書いてございますね。「汝、よく忍辱を学べり。汝いまよくフルナの人の間において止住するに耐ゆ。汝いまよろしく去るべし」。アタランティイの方に行きなさい。「未だ度せざるものを度し、未だ安んぜざるものを安んじ、未だ涅槃せざるものを涅槃せしめよ」と。こういうふう^にに阿含経に出ております。これは、まさしく大乘の思想でございます。決して小乗じゃないですね。

三

それからもう少し申し上げたいと思うんです。これも雑阿含経にある一節でございます。ちよつと読ませて頂きますと、こういうことが書いてある。「一切諸法の起滅を了知し、起滅というのは起つたり滅したりですな、生滅です、をよく知つて、「取すべきは己おのれに取し、断すべきは悉く断じ給えることをもつて仏と名づけ奉る」。仏様というのは、一切諸法あらゆる現象の生滅の因縁をよくご存知になつて、実行なさるべきものは実行なさり、断すべき煩惱は断じられた、だから仏と名づけたてまつる。「仏の世にいますや、蓮華の泥の中に生じてさらに泥の着かざるが如く、世にありて世に着せず、一切の煩惱を破し、究境して生死の差異を離れ給うをもつて仏と名づけ奉る」とこうある。法華経の中に、「不染世間法 如蓮華在水」という言葉がございますね。「世間の法に染まざること蓮華の水にあるが如し」。その言葉がここにあるんです。決してあれは法華経でいきなり出てきたことばじゃなくて、原始仏教の經典の中途で蓮華の泥の中にあつて泥の着かぬとあつて、それを非常に美しい文章で書いたものです。こういうふうにあります。

そのほか、大乘經典の中の言葉が、阿含經の中にあるということはいくらでも証明することが出来ます。例えば、「法華」の中で本多日生さんが、小乗仏教と大乘の經典の中に大乘の思想がないなんてことは間違いだというようにことを書いています。中阿含にこうある、増一阿含にはこうあるということが書いてある。例えば、増一阿含にこういうことがありますので読まして頂きますと、「善逝」、善逝というのは仏さまのことですね。「この地あり質直にして過失なく微妙にして諸仏あり、大乘の行を求む」と書いてある。ここで「大乘」という言葉があるんですね。だから大乘というのは大乘が起つてから、初めて自分が大乘で、今までの仏教は小乗だといっているかと思っていいたらそうでない。「大乘」という言葉があるんですよ。阿含經の中にも。大乘經典のようにたくさんは出てきませんが、「大乘」という言葉はある。後の人は、「こういうものは後からの付加だ」という。阿含經も、お釈迦さまが亡くなって第一集集の時にアナンが自分の記憶をたぐつて、こういうところでお釈迦さまがこういうふうにおっしゃったという。それだけではないんだ、後からだいぶ付加したものがあんだという。それはそうでしょう。そうですけれども。

そこで私はね、私が永いこと学校の先生をやっていますから、こんなことを言うんですけど、こういうことを考えているんですよ。私が講義をします。そして試験をします。そうしますとね、百何十人の答案の中で、私が言ったことをピシヤリと答案の中で書ける人はまずいない。枝葉末節のことを書いている人が多いんですよ。これは先生をなさった経験の方は、皆さんそう思われると思うんです。ですから、アナンがいくら多聞であり、頭がいいといつてもですね、お釈迦さまの教えをそのままね、つまりお釈迦さまの教えが百ならば、アナンが百、それを結集の時に言ったとはどうしても思えない。割り引いて言ってますよ。お釈迦さまが百なら百のものを言える人は、仏さましかいないんですよ。それとね、阿含だけがお釈迦さまの直説法だなんていうのは、私はナンセンスだと思うのです。

で、宇井伯寿さんが、いみじくもこういうことを「仏教汎論」の中で言っていらいっしやる。「小乗は仏語に随順し、大乘は仏意に随順する」と。これは、私はいい言葉だと思う、手をたたいた。「小乗は仏語に随順する」。我々は教壇

でこう言っているでしょう。学生はそれと同じようなことを書いておられるけれど、内容がちがうんですよ。こちらの言わんとすることを書いてないんです。だから仏語に随順しているけれども、心を失なってるんですよ。「小乗は仏語に随順し、大乘は仏意に随順する」、これは大乘と小乗をピタツと言いついてある。あれだけの大学者がおっしゃっているんだから間違いない。「小乗は仏語に随順している」。ところがその仏語というのは、明らかに仏意を離れているんです。言葉はその通り述べているけれども、お釈迦さまのおっしゃるもの、そのまますべてのことです。だから大乘は仏意に随順する。

四

私はお釈迦さまの時代、出家主義と申しますが、これはもう一つの裏があると思うんです。ご存知の通り、釈迦族は隣の国から攻められて亡びますね。そのことを、お釈迦さまはちゃんとご存知なんです。隣の国から攻められたら亡びる。だから自分の親類のものを全部出家させた。これは、まあ治外法権みたいなものでね。教団が治外法権。指鬘外道というのがある、指鬘外道、アングリマール。アングリマールが人殺しをしまして、普通だったら捕まったら死刑になる。ところが、お釈迦さまが出家させて自分の教団に入れた。これはですね、誤解されやすいところなんですけれど、駈込み寺のように悪いことをしたものがみな教団に入ったら助かるというんじゃない。教団にはそういう人は入れないんです、お釈迦さまがウンと言わなければ入れない。そうでなきゃ皆悪いことをして仏教教団に入りませんから。ところがあのアングリマールだけはですね、お釈迦さまが入れたんです。そこに違いがある。で、王様が軍勢を率き連れて引渡しを命じた時に、お釈迦さまは拒絶なさった。拒絶できるんですよ、治外法権ですから。宗教の方が政治より上なんです。だから拒絶なさった。アングリマールのような罪悪の人達、こういう人たちも教団に入ると助かるんですね。ですからお釈迦さまは、自分の親族の者を救うために、みな出家させた。だからあの人達は、

国は亡びましたけれど、生命を全うすることが出来た。

出家主義というのは、私は、その意味もあるんではなからうかと思えます。だから、出家しなければ悟れないということは、どうも私には疑問です。仏教というものは、我々の政治・経済、あらゆる科学技術の面において、その根底においてなければならぬものです。出家しなければ悟れないものならば、もうやめますわ。やめた、ということになる。それじゃ何のための仏教かわからない。そうじゃなくて、あらゆる職業、あらゆる身分の人達が、仏教に帰依することによって、みんなが悟りの道に入る。そしてここに仏国土を建設することが出来るとというのが、法華經の思想であり、またお釈迦さまの根本思想であつたと、私は信じて疑わないわけでありませう。

発刊の辞

明治聖帝の遺し給える鴻謨は大正の聖代に於て大成せられざるべからず。明治聖帝の稜威により我が日本帝国が世界列強の間に獲得せる、尤も光榮ある地位を確保し、以て国力の充実と国運の發展を謀らんことは、豈に大正の聖代に臣民たる吾人が当然の責務にあらずや。吾人は此の責務を果すことによりて、日月の如くに史上を照らせる我が建國の理想を現代に実現し、以て極東の平和を永遠に維持し得べきことを疑わず。此の理想にして実現せられんか、万邦に冠絶せる我が国体は明らかに万邦の仰瞻する所となり、万邦の民は相共に範を我に取り、世界平和の曙光初めて此に開けん。然れども今日の国風民俗は斯る理想を実現せんとするに對して、多くの障礙を与うべきものなること、有識者の共に見を同じうする所なり。之が刷新と啓発とは良に今日の急務にして、其の地位職業の何たるかを問わず、苟も志ある者は相共に力を協せて之に當らざるべからず。

顧るに既往五十年間に於て、専ら西欧文明の輸入に力を用い、専ら物質的方面の發展に腐心せる我が同胞は、其の多く自覚せざる間に、極めて不健全なる国風民俗を作り成し以て今日に及べるなり。現象以外に何等の深き意義を認めず、物質以外に何等の貴き実在を認めず、眼前の事物を処理し瞬間の勢利を争奪するに急なりし既往五十年の社会は、漸く淺膚輕薄の

風を以て蔽われ、小大の事尽く其の根底を失えり。斯の如くにして社会の各方面は動搖に次ぐに動搖を以てし、人に何等の確信なく事に何等の基礎なくして、剛健質実の民俗殆ど其の迹を掃えり。今日に至るに及んでは貴賤となく老幼と無く、相率いて確信なく安慰なき生活を送り、煩悶を重ね苦惱を増し倦怠を長じ、殆ど相對して茫然自失せんとす。此の時に際して遠く建国の理想を尋ね、近く我が帝国の地位を考え、国家百年の長計を立てんとするが如きは、極めて少数なる有識者の事のみ。斯の如くにして推移せば、勢の極まる所果して如何、憂いて且つ懼れざらんと欲するも得べけんや。

若し眼前の要務を数えば、その数何ぞ限りあらん。国政を革新すといひ、事業を振興すといひ、学芸を奨励すといひ、一として緊要の事ならざるは無し。然れども斯の如くに確信無く慰安無き生活が続くるもの、一国の大部分を占むる間は、如何に精力を傾けて眼前緊要の事を処理する者ありとも、要するに基礎無くして柱を構え棟を架するが如くならんのみ。何ぞ能く正確なる国力の充実と、健美なる国運の発展とを期待し得んや。今日の急務は国風民俗の上に根本的なる刷新を加え啓発を与うるに在り。吾人は抑々何物に依頼して斯る目的を果すべきか。他無し、之に健全なる信仰を与えんのみ。吾人は有形と無形とを問わず、信仰の力に匹敵すべき偉大なる力あるを知らざるなり。学問、芸術、政治、道德その他社会百般の事物は、皆悉く吾人の心に影響を与え変化を遺すべきも、其の力の及ぶ所は要するに部分的のみ。此等百般の事物より得來れる所を統一調整し、之を渾然たる一大活力と為して吾人が行為の上に活現せしむるは信仰の力に依らざるべからず。信仰なき者の精神は散漫にして調節なし、進みて大難に當るを得ず、退いて自ら安んじ難きも異むに足らず。

近時世運の促進せるに伴い、信仰の必要を認むるもの稍多きを見る。然れども如何なる種類の信仰か能く吾人の救護に當るべき、之を判ずるに方りて一步を失えば、悔を永遠に遺さざる能わず。吾人は新奇を追い流行に趨れる明治年代の人々が、三千年來東亜の天地に無限の功德を及ぼせる仏陀の遺教を冷視せることを痛恨せざらんと欲するも能わざるなり。抑々大乘仏教の教義、就中法華經を中心として末世の衆生に説示せられたる、宏博深遠なる仏陀の教は、尤も深く宇宙人生の真相を究め、尤も精しく人間精神の本質を究めて、有らゆる人生の問題に最後の解決を与えられしものにして、大は十方三世を包みて小は眼前の一事一物を漏らさず、吾人は之によりて如何に生くべきかを教えられ、如何に死すべきかを教えられ、無始無終なる我が实在性を知ると共に、此の瞬間に於ける我が存在の意義を知り得べきなり。其の要を取れば匹夫匹婦の愚と雖も与り知るを得べく、其の精を悉せば如何なる大思想家と雖も之に包容せらるべきものは実に法華經の教義なり。最近

西歐の大思想家として知られる人々が、従来の哲学及び宗教に満足せずして、新なる研鑽の上に打ち建てたる新学説なるもの（例えば独のオイッケンの如き若しくは仏のベルグソンの如き）も、要するに自然界の研究に専なりし従来の学風を脱し、東洋流の思想に近づき来れるものに外ならず。之を法華經が最も深遠なる哲理と最も洪大なる功德とを併せ具せるに比ぶれば、日を同じうして語る可からず。況んや他の紛々たる諸家をや。斯る無偏の至宝を自己の庫中に有せる我が同胞が、之を顧みずして去つて他に索めんとするが如きは、迂も亦甚しといわざるべからず。

人々皆仏性あり。人々皆直ちに仏陀たるべし。此の心を持して世に処すれば、一事一物の微と雖も尽く成仏の因縁たるべし。法華經を色読せる者は、之により確信を得、慰安を有するが故に、成敗榮辱によりて動かされず、有らゆる境界に安んじ、有らゆる艱難に堪え、一挙手一投足の勞にも深き意義を認めて之を重んじ之を樂しみ、以て崇高潔白なる生涯を送り得べきなり。斯の如きは豈に現代の我が邦人に与うべき教訓として、最も適切にまた有効なるべきものにあらずや。吾人は国力を發展せしめん為に、今後と雖もなお西歐の科学的知識を輸入するの必要を感じ。然れども精神上の根本教義に至りては、我に斯の如くに優越せるものを有す。我は之を高く捧持して徐に彼の我に近づき来るを待つべきのみ。我自ら我が精神を此の信仰の上に托し、屹然として立ち悠然として動かば、何ぞまた外来の思想によりて絶えず動揺を來し、国民思想の統一を失うこと今日の如くに甚しきを致さんや。世の同憂者は疾く起ちて其の力を此の点に用いざるべからず、是れ實に大正年代に於ける最大急務なり。

特に吾人が意を強うすべきは、身命を惜しまずして斯る宏大なる法華經の教義を宣伝せる、日蓮上人を吾人と同一国土より出せることなり。澳土に於ける天台大師、本邦に於ける伝教大師は共に法華經の真意を攻究し宣伝することに全力を注ぎたりしとは雖も、其の態度はなお学究的を離れざりき。日蓮上人に至りては「日本第一の智者たるべき」覚悟と、「一切衆生の苦を救うべき」慈悲心とよりして一代威経を讀破して、法華經の最勝なる所以を明らかにし、更に之が広宣流布すべき最初の国土としては、我が日本帝国以外世界にまた国無きことを断定し、自ら身を以て之が弘通の魁となれる者なり。上人は無二の愛国者なるが故に、日本帝国が真に其の建国の理想を實現せんとせば、法華經の信仰によりて国民思想の根柢を固むるの外更に策無きを信じ、国家の為に之を力説せるなり。上人は弱者を憫むこと深く昧者を憐むこと厚かりしが故に、深遠なる研究に力を用い難きをものと雖も、眼前の一事一物を処理する間に法華經の真義に合致し得べき所以の道を究め、懇

ろに之を誨^{おし}えたり。上人は之を究め之を教えたりしのみならず、自ら之を身に行い、その六十年の生涯に於て法華色読の活きたる模範を示し、永く吾人を提擲^{ていせき}し策励したり。上人が吾人に遺せる教義を鑽仰^{きんじやう}し究明するは、今日の時勢に対して最も適切なる救護の方法にあらざるか。

ここに大正の聖代に於ける誠実忠良なる臣民として相共に力を協^{あは}せて時弊に対する根本的救治を企て、以て聖代の鴻恩^{こうおん}に報せんことを誓える吾人同志は、以上の理由によりて法華經の教義と日蓮上人の主義主張を現代に宣伝すべき急務を認め、敢えて微力を揃^{はか}らずして本会を創設し、文筆と言論との二途によりて斯の大事に当らんとす。月刊雑誌『法華』の発刊は之が第一歩に過ぎず、江湖有力の君子にして援助を惜しまれずば、吾人の事業も亦一步は一步より進まん。諸君子幸いに吾人の赤誠を察し、指導と鞭撻^{べんたつ}とを辞せらるる無くんば、何ぞ独り吾人同志の幸いとのみいわんや、抑々^{おとし}また邦家の大慶たるべきなり。

大正三年四月二十八日

※本稿は昭和六十二年十一月五日現宗研内で行なつた、日蓮聖人研究セミナーにて講演されたものを筆録したものです。